

左門 晓美の趣味は VR ゲームである。

それが原因で過去、デジタルワールドに迷い込む羽目にもなった。

さて、VR ゲームはゴーグルの重量から首や肩への負担が加わる。

曉美自身も自前の豊かな胸団なため、肩への負担が大きい。

ここ最近、天候が悪い。

気圧の関係か特に肩凝りが酷くなっていた。

これを機に整体を行こうと決めたのだが…。

「ほんとにこんなとこあるの？」

学校帰りに寄れるところかつレビューで評価のいいところを探し、路地裏から行ける隠れ家的な名店があると見てやって来た。

（まあ…マンションの一室使う店もあるしこんなもんか。）

奥へ進んでいくとそれまでの退廃的な雰囲気とは違う整備された格調ある入口と看板があった。

DWとの旅で度胸も無駄に付き、今更、路地裏の雰囲気に恐怖を抱く事もないがそれでも安心感があった。

同時に、どこか懐かしさを感じさせるような、優しくほのかな甘さを持つ香りがした。
「BAKU？…変な名前。」

看板を見て曉美は呟き、中へ入っていく。

店内に入るとより匂いが強くなり身体に纏わりついて来る。
間接照明の柔らかな灯りに照らされて先程の路地裏の比較からより異空間のような
気分、有体に言えば夢の中にいるような気分に暁美はなっていた。

「いらっしゃいませ、初めてのお客様ですね。」

暁美が受付の店員を見て思ったのは無機質な印象であった。
加えてその違和感を考えようすると頭に靄が掛かり思考が途切れる違和感。
初診という事で、必要事項の記入、聞き取り、施術方針の相談を受ける。
無機質ではあるが、丁寧で暁美の警戒心も溶ける。





更衣スペースに案内されるとそこには、白色のビキニタイプの水着に着替えるよう促された。

(こういうのって、ほんとに水着なのかな？)

… こういうの AV でしか観た事ないし、分かんないな…。)

暁美は同年代に比べて恐らく性欲が強い。

友人とする話題ではないが、あまり AV について話したことはないし、持っている種類も多義に渡り、回数も多い、時には友人の約束前に致す事もあり、パートナーデジモンであるサラマンダモンに小言を言われる事もしばしばあった。

そのサラマンダモンは今は家でゲームでもしているのだろう。

カーディガンを脱ぎシャツのボタンを外していく。

スカートをハンガーに掛け、まずはショーツを脱ぎ衣類籠に入れる。

その瞬間、暁美は周囲をキョロキョロと見渡した。

誰かしらの気配を感じたからだ。

試しに少し周囲の物を弄ってカメラがないかを探してみる。

(AV だとこういう時よく盗撮される場面あるよね…。)

考えすぎか…それより。)

暁美は自分の陰部を触る。

どこから湿り気を帯びているのが分かった。

(最近、ムラムラしそうかな…。)

男の人はこういう時、意志に反してチンチン勃起とかして大変って聞くけど女で良かった…。

まあ、この胸が付いてきたからどっちがいいとか言えないけど。)

ブラを外し、自身の豊満な乳房が解放され揺れる様を見ながら、暁美は思った。

その巨大な肉の房は、若さから脇に流れず、美しい丸みを持って盛り上がっていた。

その胸で周囲の情欲を孕んだ目を向けられる事もあり、アバターも胸のスライダーを最低値にしている。

しかし、同時にその情欲の目が自身の快感となっている事も暁美は自覚的であり、そういった思考を巡らせる度に溜息を吐いた。



着替え、施術室に行く。

照明が弱く薄暗い、そしてまた匂いが強くなっている。

暁美はどこか意識溶けているような感覚を味わっていた。

「それでは、そのベッドにまずはうつ伏せになってください。」

奥の方から声が聞こえる。

声は受付と同じく無機質であった。

(男ではなさそう…そりゃあそうか、か~、なんか頭がとんだエロガキみたいで恥ずかしくなってきた。)

この感覚だってようはリラックスできる環境って事だろうし。)

暁美は、ベッドに乗りうつ伏せになる。

大きな乳房とヒップがベッドの間で柔らかくぐにゅりと押しつぶされる。

(うお…凄い。)

アルマオイルを塗られ、施術師の指が腰に吸い込まれ押し解していく。

全身が粘土のように柔らかく成型され直していく、それが自分が肉の塊である事を実感させていく。

僅かな痛みが心地良く今度は骨に指を当てられると自身の固さ、骨格を理解できる。

施術が進んでいき、背骨、肩甲骨周りを解かされていく。

暁美は、施術の気持ちよさに眠くなり、意識がおぼろげになっていた。

(あれ…?)

薄まった意識の中で施術師の指が腋と乳房の間を捏ね繰り回しているのを気付くの行為が開始されてから数分経った頃に気付いた。

よく見ると、オイルが白い施術用の水着を透かし、暁美のピンク色の乳頭部の薄くではあるが浮き上がらせていた。

更に水着が密着し、乳輪部が膨らみ発情の色香を醸し出していた。

「う…ん。」

吐息が荒れ、漏れ出てくる。

暁美は、自然と何かを味わうように舌を下唇に這わせるように舐め味わった。

動きは露骨になり、脇と乳房の間を重点的に刺激し、それに暁美は身体をくねらせる。

そして、胸板の上で大きく盛り上がる巨大な乳房を脇から揺らすように揉まれ、乳房を波打たせながら二本の指が円を書くように乳房の肉を回しなぞり、痛々しい程に勃起した暁美の乳頭を指が這っていき乳腺部分を刺激する。

くねらせるのではなく痙攣するように暁美の腰が揺れ、激しくはないまでも、媚肉からは透明な愛液、そして乳頭から白い母乳が弱くではあるが噴き出した。

薄い意識と施術の確かな効果…そして緩く纏わり付く快楽に暁美は声を上げず身を任せた。



「アケミ? どうしたこの間からボーッとして?」

「うん? そう…?」

「そうだ、マッサージ行ってからだ。

　　だいぶ、肩の調子は良さそうになったが、今度は惚けてて不安になるぞ?」
(マッサージ…。)

　　結局あの後、暁美は受付に起こされて帰る事になった。

　　どうやら、大分初めの方で寝ていたようであった。

　　胸も陰部を見ても確かにあの淫らな事を行われた痕跡はなく、周囲の様子もそれを感じさせなかった。

　　店の雰囲気もあり、本当に淫夢を見たような気分であった。

「…また、今日マッサージ受けてから帰るから、サラマンダモンは家で待ってて…。」「うん? ああ…それではゲームをして待つよう。

　　ほんとに大丈夫か? 霸気がないぞ?

　　事故とかに気をつけろよ?」

「うん…。」

「…。」

　　サラマンダモンと別れ、ふらふらと暁美は、学校へ向かう。

　　スカートの影に隠れショーツからは液体が漏れ出していた。



6

「いらっしゃいませ、施術は前と同じように肩を中心にいたしますか？」
「…今度は全身をお願いします。」



薄い意識と、甘い匂いが全身を包む。

「あ、っひあ…だめ。」

暁美の肉厚の媚肉がパクパクと魚の口のように開閉する。

そこから大量の愛液を垂らし糸を引く。

暁美の媚肉のビラは小さく、そこを這うように施術師の指が内側から解きほぐしていく、その合間に形が整った肉唇の上側に顔を出しているクリトリスを親指と弾かれると、連動するように暁美の腰が浮き、抑えようとしても抑えられない甘い喘ぎ声が漏れ出してくる。

腰を下ろすのを忘れたかのように快楽に身を震わせていた。

しかし、それ程の刺激の中でも暁美の意識は夢の中のように薄くぼんやりとしていた。意識も連続してゐるのではなく、うたたねをするように途切れ覚醒するのを繰り返していた。

それはどこか、意識が身体から抜けるような感覚であった。



しばらく、墮ちるようになくなっていた暁美の意識が快楽で覚醒する。
しかし、視界はおかしく自身を第三者の視点で見ていた。
だが、身体を包む快楽の刺激はまさしく見た自分の意識とリンクしていた。
そこに映る自身の姿は施術師の肉棒を受け入れ、肉感的に身体をのけぞれせ喘いでいる自分の姿であった。

「なっ…あっ」

衝撃と抗議の声を上げる間もなく、施術師の巨大な肉棒に突かれる。
腹を抉らるような異物が蠢く衝撃と同時に正体不明の快楽が身体の全身に電撃のように響き渡る。

はっきりとした意識がすぐに夢に墮ちる様に快楽に支配され何も考えられなくなる。
意識せずとも暁美は肉棒を飲み込んだ下半身をくねらせ自然と腰を持ち上げ、より肉棒がピストンしやすいようにしていた。

自分の肉壺が本能的にうねり、肉棒を包み込もうとするのが分かる。
膣奥が男を求め、脈動するのが嫌でも分かった。

目の前にある姿、それは正しく発情した雌であった。

その考えが同時に身体に作用し、一気に快楽の波が襲ってきた。

人間的な理性、意識が身体の外へ出される感覚。

自身の肉体が快楽のみのがらんどうになるような感覚であった。

膣肉が快楽に反応し強い収縮をし、施術師の陰茎を奥へ奥へと吸い込もうとする。
その快楽と自身が自身でなくなる状況に暁美は狼狽えた。

恐怖と期待が入り混じった表情を察してか施術師が親指と人差し指で尖りきった乳頭を強めに摘まむ。

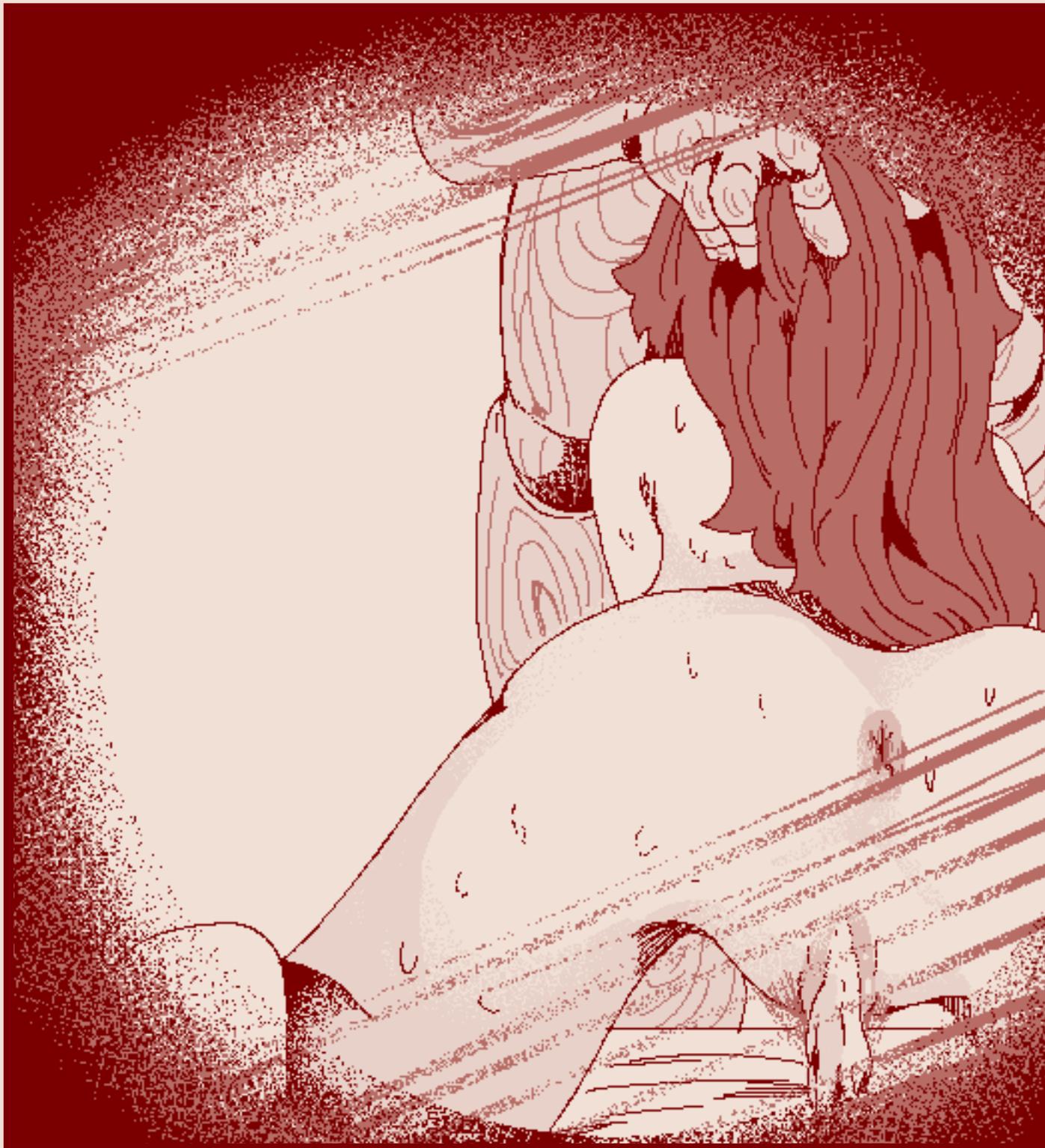
「お~お~!!!!お~う~!!!」

甘くない動物的な喘ぎ声を上がる。

暁美の乳房がプルンと弾み、同時に肉感的な太ももが施術師の腰を締め上げた。
それを合図に絶頂を迎えるように収縮を繰り返す暁美の膣奥に精が撒かれた。
何度も陰茎が柔らかい媚肉に包まれ脈動するのを暁美は見届けそして意識を失った。

途中で微睡みの様に意識が回復する。

その視線の中では、自身がだらしなく媚肉から施術師の精液を垂らし、アナルを引くつかせ、下品な音を出しながら施術師の陰茎を口に頬張る自身の姿であった。





「うお!!!??？」

次にはっきりと暁美の意識が戻ったのは自身の家のベッドであった。
(嘘…知らない男で処女喪失!?いつ帰ったの!?)

「おい、やっぱりマッサージ行ってから変だぞ？」

大丈夫か?昨日も帰って来るなり寝ちまって。」
サラマンダモンが心配そうに、暁美の様子を見る。

暁美はどだどだと慌てて洗面所から手鏡をパクリトイレに駆け込む。
「膜!!!」

ショーツを降ろし、陰部を開き手鏡で覗き込む。

「…ある!!!!」

シャアア!!!と暁美が声を上げる。
(やっぱり、夢?でもなんか変…な…か。)

「おい、やっぱり変だぞ!ボーッとして!」

「あ…うん。

今日もマッサージ行くから先帰ってて。」
登校する暁美の様子はまた、惚けた状態に戻っていた。
サラマンダモンが声を掛けても上の空であった。

「チッ、胡散臭いけど頼ってみるか。」



天気が荒れ、雨が降る。

そんな中、暁美は傘も差さずマッサージ店に歩いて行く。

「はい、ストップ。」

「…誰？」

そこには袈裟を来た暁美と同年代くらいの女性、鞍馬りんねとパートナーデジモンのカブトシャコモンがいた。

「おい！りんね！女子高生とは聞いてたけど美人だし！おっぱい大きいぞ!!!」

カブトシャコモンのお下劣な感想にりんねが蹴りを入れる。

「ボクが呼んだ。」

りんね達の後ろから、サラマンダモンが顔を出す。

「前、クソ胡散臭いチラシが来てたから連絡したんだ。」

写真にデジモンが写ってたし力にはなるだろうと思ってね。」

「デジモンってどいつもこいつもノンデリなのかしら？」

まあ、いいわ。

それよりこれから先には行かせられないわよ。

何を見たのか知らないけどあの奥にマッサージ店なんて営業していない、あるいは、アパレル関係の倉庫。」

「暁美のスマホを覗かせてもらったけど位置情報からしか、場所を割り出せなかった。」

それにデジモンの残滓がある。

明らかに今の暁美は何かされてる！」

「そう…。」

暁美は、無感情に答え歩を進めた。

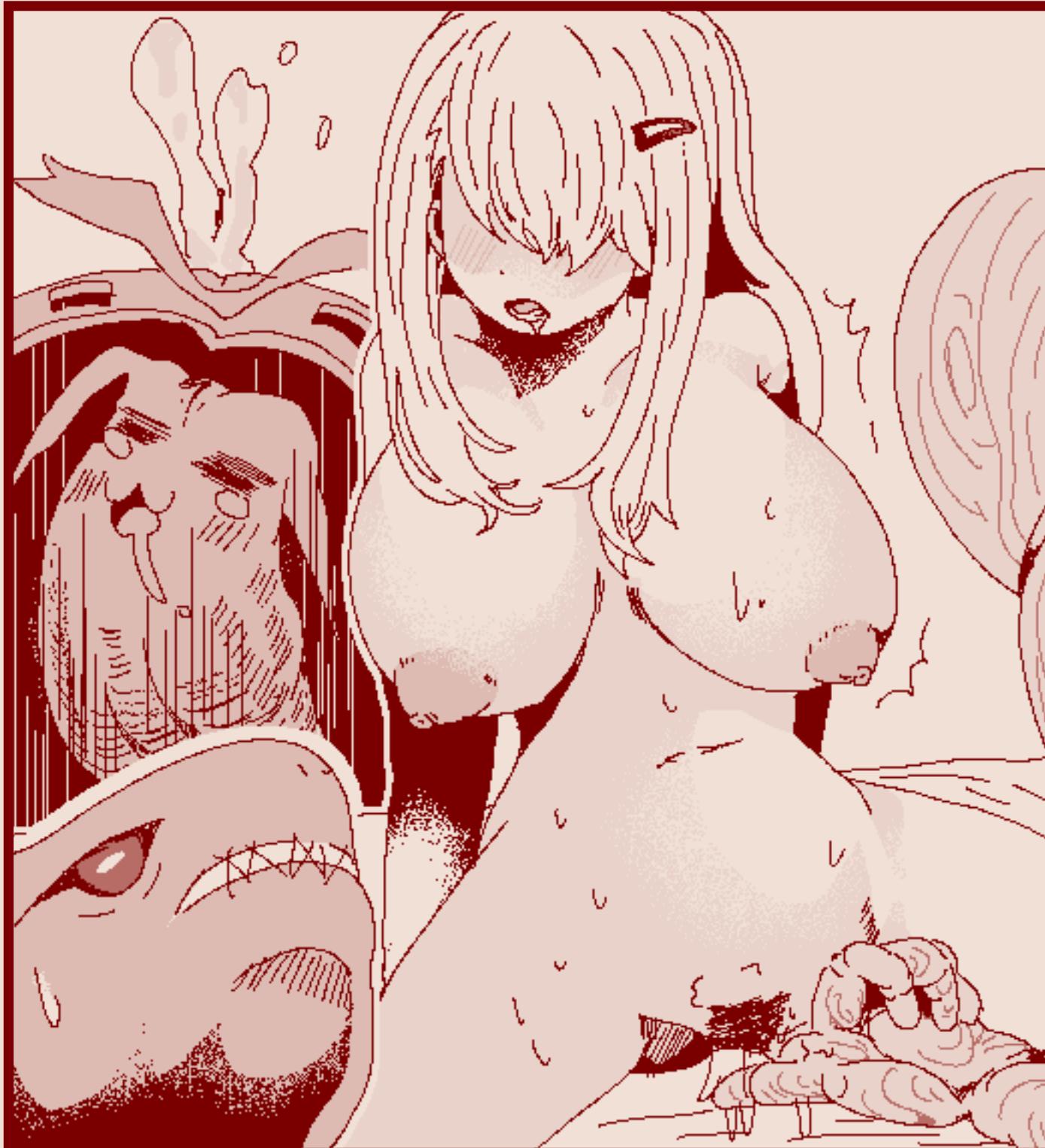
「ちょ…止ま…力強!!!」

りんねが抑えようとしても引き摺って行く。

「やめとけ、りんね。」

意識が何かされてるならここで止めても結局また戻って来るし惚けたまだ。

言った通りワガハイらもマッサージ店に行くぞ…おっほ♥黒パン…痛い!!!!」



「あっらめ!! いっちゃう!!!」
「ああ!!! ワガハイの貝汁出ちゃう!!!」
(うわ…こいつらなんの役にも立たねえ…。
ひとりだけ隠れてて良かった。)

マッサージ店に潜入したりんね達は速攻で店の雰囲気に飲み込まれミイラ取りになっていた。

(しかし、なんだ…こいつら木製のマネキンか?
芙蓉…? この匂いが幻というより、意識に介入してるのか?)
そこら中にいたのは人間ではなく木製のマネキンだった。
それに囲まれたりんね達はただベットに寝ている。
意識のみが DW のようなデジタル空間に飛ばされ、そこで淫らな事をされていた。

「そして、これを起こしてるのはお前か…。」

そこには、マネキンに囲まれているバクモンがいた。

「邪魔しないで？ 皆んな身体が欲しいんだって。」

「成程、デジモンに人間の身体を乗っ取らせようって訳か。

だからマッサージって体で意識を DW に飛ばす事をしてたのか。

人間の本能に直接作用する快樂で意識を DW の方に固着させて、マッサージで肉体の方もデジモンが入りやすいように整形してたのか。

だが…!!!」





サラマンダモンの後ろから、半裸の女性が出てくる。

「りんね達、アレで仕事はしたみたいだな。

暁美の意識を起こしてくれてたとは。」

「いや、今はアケミ・サーモですよ。」

それは、暁美のプレイしている MMORPG でキャラであり、DW での活動する姿であった。

「いきますよ！」

「おうよ！」

「サラマンダモン！ デジメンタルアップ!!! マグナモン OPUS !!」

サラマンダモンは、黄金の鎧と4本と4つの属性を持つデジモンにアーマー進化した。

「一撃で終わらせますよ!!!!」

アケミの掛け声と共にマグナモン OPUS の腕から放たれた球状のそれぞれの属性のエネルギー波がマネキンとバクモンを巻き込み吹き飛ばした。



「う~ん。」

バクモンが目を覚ますと、そこには激怒した暁美とりんねが仁王立ちしていた。
「やっと起きたわね。

ほら、他にも入れ替えた人間いるんでしょ？さっき意識飛ばされたときにはいるの見たわよ！」

「早く、戻さないともっと酷い目遣わせるわよ。」

「あ～！酷い!! みんな殺しちゃったの!? 同じ人間なのに!?!」

「人間? マネキンは人間じゃないわよ? デジモンだとそこら辺の区別もつかないもんなの?!」

「うん? そんな事ないだろ? ワガハイは女の子の尻だけで誰か分かるぞ?」

「…ボクも人間とそれ以外の区別は最初からつくけど?

最低限マネキンとは間違わないよ?」

「そんな事ないよ! だってみんな意識を持ってたしここから出してって!!」

「「「え?」」」



雨の音と共に何かが暁美達のところへ向かってくる。
声も上げず、黙々と…ただ少し笑い声を上げながら。



「あんた…何と人間を入れ替えてたの…？」
ギィと重く低くゆっくりと入口の扉が開いていく。

5人はその音にビクッと身体を震わせる。
何かが扉の中から、暁美達の事を覗いている。
「ケ…ケヒ…バレちゃった。」

5人の悲鳴を何人かの笑い声が路地裏に木霊した。

オワリ

